

- 日時：2021年11月14日（日）
- 場所：立川教会
- 説教題：「イエス・キリストの啓示によって知らされた福音」
- 聖書：新約ガラテヤの信徒への手紙1：11-17（p342）
- 讃美歌：214「わが魂のひかり」・436「十字架の血に」

お早うございます。

先週は、召天者記念礼拝を無事に守ることが出来、午後2時から、第二高尾霊園で墓前礼拝を行うことが出来ました。感謝しています。特に、車を出していただいたお二人の方には、心から感謝致します。まだ、立川教会のお墓のある第二高尾霊園を訪れた事の無い方は、ぜひ一度いらしてみてください。静かな、落ち着いた所にあります。

教会は、それぞれの墓地を持っていますが、墓地を持たない教会は、教会内に納骨室があることが多いです。幼い頃から私の信仰を育んだ大井バプテスト教会も、大きな教会ですが、墓地はなく、代わりに納骨室があり、遺影が飾られています。

又、私たちの属する日本基督教団には、教団立のお墓もあります。

私の両親と妹は、常磐線の我孫子にあるラザロ霊園と言う、キリスト者の霊園に眠っています。周りのお墓の墓碑は皆十字架と聖句が刻まれている美しい敷地です。

関心がお有りの方は、少し遠いですが、いつでもご案内致します。

人生を終えようとする時ほど、神様の御前にあって肅然とさせられる時はないと思います。自分の全ての歩みが明らかにされる時です。その時に、良かったことも悪かったことも含めて、全てを神様の御手に委ねることが出来れば、どんなに幸せかと思います。

そのような人生を歩みたいです。

さて、今日から、6回にわたってガラテヤの信徒への手紙を取り上げます。主イエス・キリストの福音を、ユダヤ人以外の私たち異邦人に宣べ伝えるために、神様によって選ばれた使徒パウロは、7つの手紙を書きました。これまでの研究から真正パウロ書簡と呼ばれるものです。即ち、ローマの信徒への手紙、今回取り上げるガラテヤの信徒への手紙、フ

イリピの信徒への手紙、フィレモンへの手紙、それに、あと三つ、コリントの信徒への手紙一と二、そしてテサロニケの信徒への手紙一の7つです。

私が取り組むあと15回の説教では、前回までのローマの信徒への手紙に続き、使徒パウロが、主イエス・キリストの福音をどのように受け入れ、理解し、キリスト教を今日の世界宗教とする礎を築いたかを、パウロが書いた手紙から学びたいと思っています。

それでは、ガラテヤの手紙についてですが、この手紙は、題名にあるように、ガラテヤ地方の諸教会に書き送ったものです。ガラテヤ地方と言うのは、ローマ帝国の領土の行政区(州)の名で、この行政区には、他にアンティオキア、リストラ、イコニオン、デルペなどの諸都市が含まれていました。使徒言行録13、14章にこれらの都市の名が出て来ますが、この手紙は、それらの諸都市にある教会に向けて書かれたものと考えられています。

ところで、この手紙がいつ書かれたのか、その正確な時や書かれた場所は良く分かっていません。恐らく、紀元50年以後、イエス様が十字架に架けられてから20年後ですが、その数年間の内で、パウロがエフェソに滞在していた時とも推定されています。

ところで、一体何の目的でパウロがこの手紙を書いたかと言うことです。

それは、ガラテヤの諸教会に問題が起きたことが原因です。

パウロがこの地方を去った後、ガラテヤの諸教会は、パウロが教えた最初の福音から離れて、ユダヤ教的な、即ち律法を重んじる教師達に動かされ、律法を受け入れて割礼を受けようとしていました。それに対しパウロは、自分が伝えた教えこそ神様から出た福音であることを示し、ガラテヤの人たちを正しい信仰に立ち帰らせようとしたのです。

この手紙は、パウロ自らが語る自分の伝記でもあります。そして、ローマの信徒への手紙と同様に、主イエス・キリストの十字架による罪の贖い、信仰義認、律法に対するキリスト教的評価などについて教理の面からも明らかにしています。

それでは、今日与えられた聖書の御言葉から見てまいりましょう。

11、12節です。

11：兄弟たち、あなたがたにはっきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。

12：わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。

この2節に込められたパウロの思いを理解出来るでしょうか。

パウロには、この言葉に拠って立つ以外にありませんでした。それは、「わたしが告げ知

らせた福音は、・・・人から受けたのでも教えられたのでもなく、（ただ）イエス・キリストの啓示によって知らされた」福音であることです。

続く13節でパウロ自ら告白しているように、実は、キリストの福音を語る者として、パウロほど相応しく無い者はいませんでした。相応しくないどころか、福音を語ることなどあってはなりません。何故なら、彼は、キリスト教を信じる者たちを容赦なく弾圧し、「徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていた」からです。イエス様を十字架に架けた律法学者やファリサイ人、長老たちと同じく、主イエス・キリストを神の御子・救い主として信じ、告白する人々を、捜し出しては逮捕し、獄に入れ、殺そうとしていた男でした。

その男パウロが、一転して、迫害する者から、福音を宣べ伝える者に変えられたこと、それは、ただただ、主イエス・キリストから直接受けた啓示による以外には考えることが出来ないものでした。

13節、14節で、パウロはこれまで自分のして来たことを告白します。

13：あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。

14：また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。

使徒言行録第7章54節以下をご覧ください。新共同訳聖書227頁上段です。そこから下段の第8章3節まで。ここに、パウロがサウロと呼ばれていた時代の彼の行動が出ています。

【使徒言行録7:54-8:3、p227】

このパウロがです。

ガラテヤ書に戻りますが、続く 1 章 15 節から 17 節のように変えられます。

15：しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、

16：御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、

17：また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。

16 節にある、主イエス・キリストの啓示、即ち、神様が御子であるイエス様をパウロに示した場面です。パウロは、このことについて、2 度ならず、3 度、繰り返して証言をしています。パウロが復活のイエス様に出会った場面ですが、使徒言行録の 9:1-19 (p229) 、

22:1-16 (p258) 、26:1-23 (p265) にありますが、今日は、最初の証言である第 9 章 1-9 節までを見てみましょう。パウロに何があったのかです。229 頁です。

【使徒言行録 9:1-9 (p229)】

このようなパウロに、続いて何が起きたのか、9 節後半から 25 節です。

【使徒言行録 9:19b-25 (p230)】

パウロの身に起きた、普通では信じることの出来ない事柄、その福音は、まさしく「人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされた」以外に、誰も理解することは出来ないものでした。

そして、神様から示されたこの事実の故に、パウロは、ペトロを始めとした 12 使徒の誰にも臆することなく、大胆に福音を宣べ伝えることが出来たのです。

そして、キリスト教を、ユダヤ教内の小さなグループから、世界的な宗教へと発展させました。即ち、私たち全ての者は、ユダヤ人であろうと、ギリシア人であろうと、男である

うと、女であろうと、神様を信じ、キリストによる十字架の贖いを信じ、死を打ち破る復活を信じるただその信仰によって救われると言う教えによってです。

パウロのその教えに対し、パウロに反対する者たちが現れます。律法を重んじる人々です。これらの人々によって、ガラテヤの諸教会に動揺が生まれていることを知ったパウロが、改めて諸教会に宛てて書いた手紙、それがこのガラテヤの信徒への手紙です。

第2章以下は、パウロの初めの教えとは何であったのかを、もう一度人々に思い起させるもので、私たちも学びを深めて行きたいと思います。

祈りましょう。